「瞬時にベストを選ぶ力」

| PROFILE | 近藤　英司：産科婦人科学　准教授

1971生まれ。1996年山口大学医学部を卒業後、三重大学医学部附属病院、国立津病院、県立志摩病院、松阪中央病院、山田赤十字病院、三重大学医学部附属病院、がん研有明病院を経て、2016年より三重大学医学部附属病院婦人科に勤務、現在に至る。

続いてインタビューを行ったのは、産科婦人科の近藤先生。ダ・ヴィンチの第一印象を尋ねると、「小さいころはガンダム世代で、医療の進歩もここまできたかと感慨深いものがありました」との答えが返ってきた。

週に3回前後の手術を担当するという先生。時には高難度の手術もあるようだが、プレッシャーを感じることはないのだろうか。

「手術前にあらゆる想定をします。経験や研究に基づく知識の膨大なデータベースから瞬時にベストを選ぶ力が手術には必要です。医療に関するどんな知識をどれくらいもっているのかによって引き出しの数に大きな差がでます。そういった知識のアップデートには今も努力は惜しみません」

しかしながら初めての手術はさすがに緊張したという。

「でもね、緊張してもしなくても、そういった術前の想定や知識のアップデートがきちんされていれば、結果はちゃんと出てくるものなんですよ」

小さいときは虫や動物が好きだったと語る先生は、「昆虫のフォルムって、なんかかっこいいじゃないですか」と少年のように目を輝かせる。学生時代やその後もバリバリの理系人間だったが、最近はゲーテやサリンジャーの本も読むそうだ。

「これが思った以上に面白くて」スターウォーズのファンでもある、いろいろな顔を持つ先生。産科婦人科を選んだ理由は何だったのだろうか。

「もともと子どもが好きなんです。子どもってほら、無邪気で素直じゃないですか」

三重大学病院で受け入れる出産は、決して簡単なものばかりではない。当直深夜に急遽帝王切開の手術を決断することもある。日々の研鑽がどんな時でもベストを選ぶ力となっているのだ。

そんな産科婦人科の領域でもダ・ヴィンチの活用が注目されているらしい。

”もっと知りたい！“

ダ・ヴィンチ × 産科婦人科

産科婦人科では、子宮体がんなどの手術でダ・ヴィンチを活用している。従来の子宮体がんの開腹手術では、骨盤の奥深くの患部を覗き込むような姿勢で行わなければならなかったが、ダ・ヴィンチ支援下では、楽な姿勢でも視野が確保されて、目の前で手術部位を確認でき、出血点もすぐわかるという。

また、開腹手術に比べ、ダ・ヴィンチのように体の数カ所に小さな穴を空けて行う腹腔鏡手術では、傷跡を最小限にすることも、産科婦人科が対象とする女性の患者さんにとっては大切なメリットとして受け止められているようだ。

話は変わるが、将来的にダ・ヴィンチやA・i技術がもっと進歩したら、全てロボットが手術をする時代になるのだろうか。

「例えば寸分狂わずに決まった車のパーツを生産するのであれば、それは可能かも知れませんね。しかし、人の体にはそれぞれ個性があります」

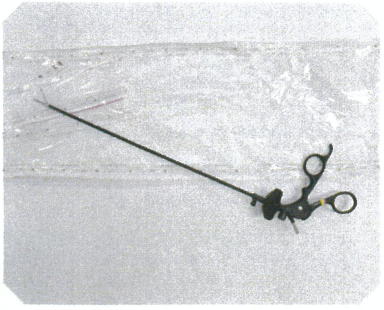
人にしかできないことに、ロボットにしかできない技術が加わることで、医療の幅がもっと広がる。それがこれからの医療のテーマの一つになっていくのかもしれない。

#02

近藤　英司

私の原動力

『鉗子（かんし）』



腹腔鏡手術で使う鉗子。先端部分が両方動くもの、片方だけ動くものなど様々な種類があり、またメーカーによっても特性が違う。先生は、手術時の手先となる鉗子にこだわりがあり、ラパロ（腹腔鏡）の鉗子がお気に入りとのこと。ダ・ヴィンチなど医療ロボットが導入されても、手術の内容や症状によって腹腔鏡か開腹か、どの手術方法がベストなのかを選択するのは医師の役割。弘法筆を選ばずという言葉は医療には合わない。自分の体の一部のように動いてくれる器具を選ぶこだわりも医師としての大切な責任なのだろう。

MEWS

MIE UNIVERSITY HOSPITAL | 2019 SUMMER | TAKE FREE | VOL.28

【特集】ダ・ヴィンチ

ここまできた、
最先端ロボット手術。